

学び合う授業と「ふるさとキャリア教育」で 子ども・教員・地域が響き合う

秋田県大館市

主要産業の衰退や人口減少といった課題を抱える秋田県大館市では、市の未来を担う子どもたちに身につけてほしい資質・能力を定めて、その育成に向けた施策を、県教委と連携しながらすべての公教育機関が行っている。中でも、小・中学校では、「共感的・協働的な学び合い」を取り入れ、各校が工夫を凝らした授業を実践している。

取り組みの ポイント

- 1 2040年に目指す市の姿から考え、子どもに育むべき資質・能力を「おおだて型学力」と定義。就学前教育から高等教育までの共通目標として、浸透させる。
- 2 施策の目標や基本方針を全市で共通化した上で、各校が特色や課題を踏まえ、独自の活動を展開。

秋田県大館市 プロフィール

◎秋田県北部の大館盆地に位置し、大半を山間部が占める。縄文時代早期の遺跡が残るなど、古くから人々が定住し、明治期には多くの鉱山が開山して栄えた歴史がある。秋田犬や比内鶏の発祥の地で、きりたんぼ、大館曲げわっぱなどが名産品として有名。

人口 約7万1,000人 面積 約913km²
公立学校数 小学校17校、中学校8校
児童生徒数 4,456人
電話 0186-43-7112 (学校教育課)
URL <http://www.city.odate.akita.jp/dcity/kyokenkyu/>

大館市が目指す教育

公共的な価値観を備え、 ふるさとを支える人材を育成

秋田県大館市は、良質な鉱石の産地として発展してきたが、1980年代以降、鉱山の閉山が相次ぎ、産業衰退や人口流出といった問題に直面していた。2010年に就任した高橋善之教育長は、そうした市の状況における教育の役割を次のように語る。

「教育による人づくりが、地域の衰退を押しとどめる役割を果たします。一刻の猶予も許されないという切実な思いで教育改革に着手し、失われつつあるふるさとを守るという使命感を持って、教育長職を務めています」

人口減少などの問題は、社会や経済の変化による要因が大きいですが、高橋教育長は、社会の変化を見過ごすだけだった従来の教育にも、責任の一端があると捉えている。そうした考えが、「ふるさとを支える気概を持

つ人材を育成する」という大館市の教育方針に結びついている。

「これまでは、自分1人が経済的に豊かになることが幸せだとする、個人を優先した教育がなされてきたように思います。その結果、志を遂げる場所は潤沢な資本を持つ都市部で、ふるさとは、都市部で成功した人が後に戻る場所という位置づけになっていました。しかし、今求められているのは、生まれ育った地域や社会が自分とともに豊かになることで得られる『幸福感』ではないでしょうか。本市では、個を大切にするとともに、地域や社会への貢献も重視する公共的な価値観を持つ『共感的・協働的』人材を育てようとしています」(高橋教育長)

「おおだて型学力」を策定し、 就学前から一貫した教育を展開

そうした教育方針に基づき、市の



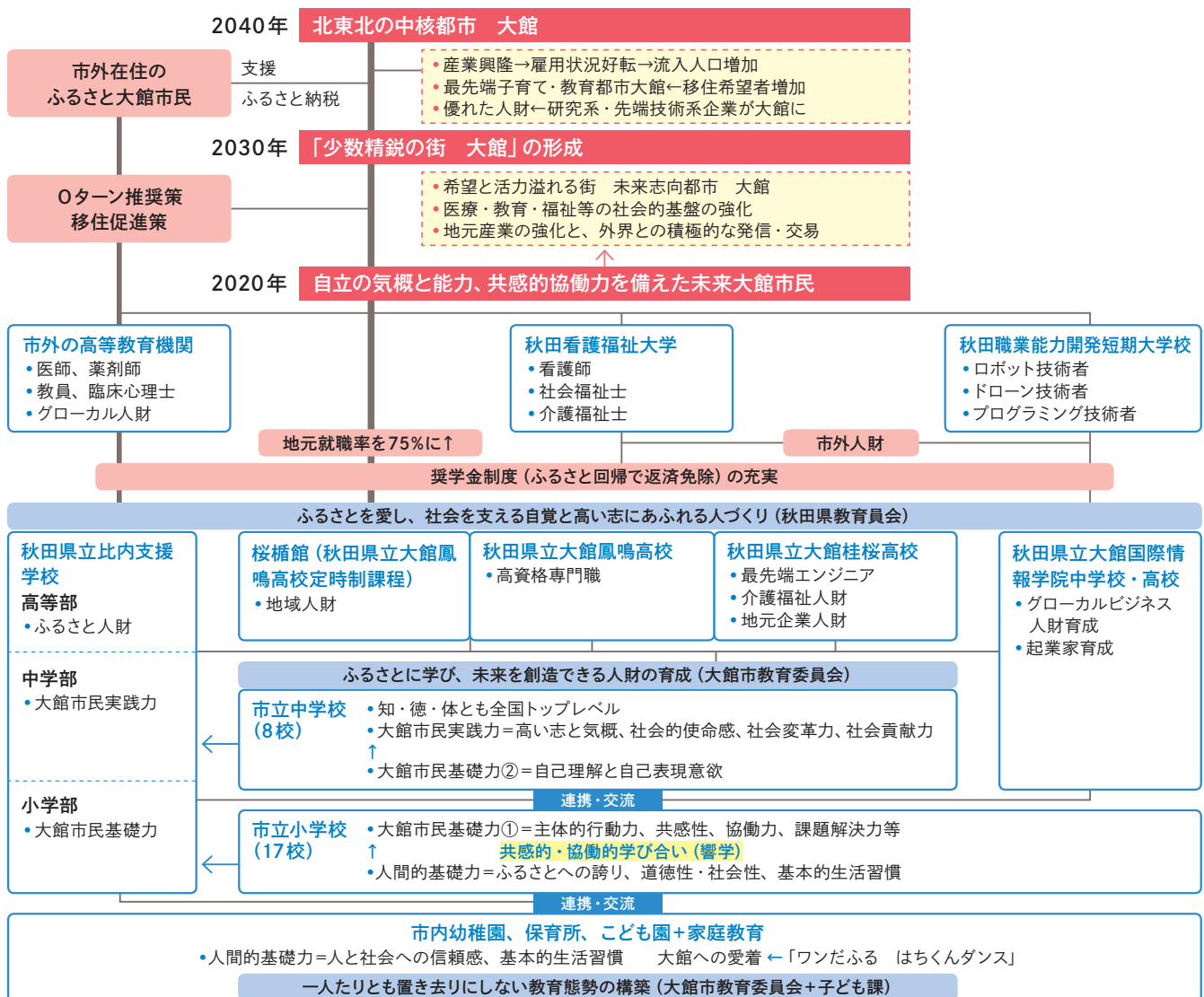
**教育長
高橋善之**
たかはし・よしゆき
秋田県公立中学校教諭・校長、秋田県総合教育センター指導主事、秋田県教育庁北教育事務所所長などを経て、2010年度から現職。

未来をイメージして、「未来大館構想図」(図1)を策定した。2040年に「北東北の中核都市」となることを目標とし、その目標を起点に、今、教育で取り組むべき課題を検討した。

そして、地域の未来を担うために必要な資質・能力として「おおだて型学力」を策定し、「自立の気概と能力を備え、ふるさとの未来を切り拓く総合的人間力」の育成を目標とした(図2)。

「おおだて型学力」は、3層から成る。土台となるのが、「人間の基礎力」だ。日常生活や社会生活を送るために必要最低限な資質・能力を、就学

図1 大館のすべてのベクトルを未来に向けて～「未来大館構想図」～

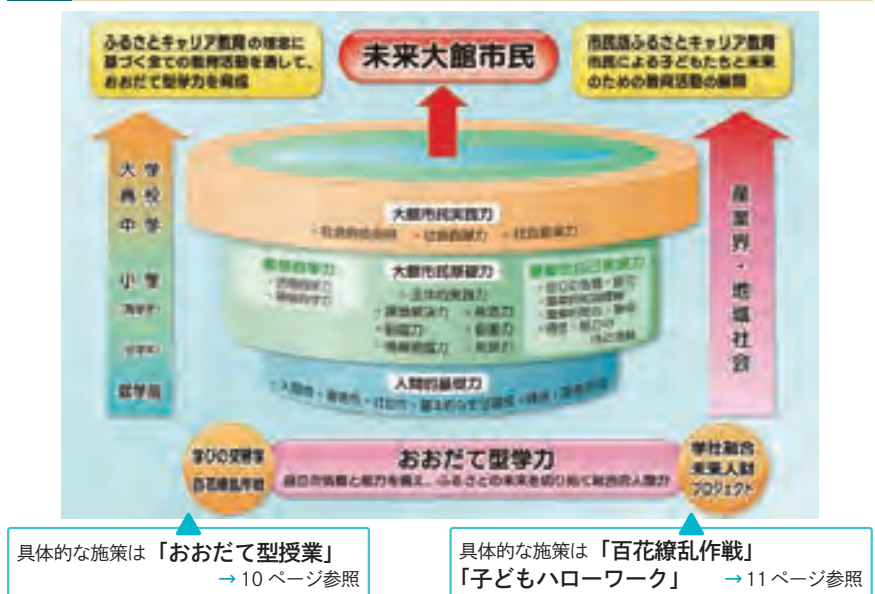


*大館市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

前から小学校低学年にかけて、規則正しい生活や自然体験、人とのかわりを通して育成する。その土台の上に、大館市民として身につけてほしい「大館市民基礎力」を設定。小学校中学年から高学年にかけて、授業や行事、地域と連携した活動などを通して育成を図る。そして、中学校以降は、地域貢献活動などを通して、社会とのかかわりを考え、実行できる「大館市民実践力」を育てていく。

この「おおだて型学力」の育成に向けた取り組みの柱となるのが、「主体的・対話的で深い学び」を取り入

図2 未来大館市民を育成する「おおだて型学力」構想図



具体的な施策は「おおだて型授業」
→ 10 ページ参照

具体的な施策は「百花繚乱作戦」
「子どもハローワーク」 → 11 ページ参照

*大館市教育委員会提供資料を一部改編して掲載。

れた「おおだて型授業」と「大館ふるさとキャリア教育」だ。それらの詳細を見ていこう。

おおだて型授業

子ども同士の学び合いを軸に 主体性・協働性を育む

同市では以前から、「主体的・対話的で深い学び」に先行して市独自の授業スタイル「共感的・協働的学び合い＝響学」を実践してきた。「おお

だて型授業」は、秋田県教育委員会が県内各校に示した「探究型授業」を土台にして、この「共感的・協働的学び合い」を行う授業だ（図3）。

「共感性」は、「対話的学び合い」が成立するために必須の前提条件としている。「協働的」は、クラス全員が助け合い、切磋琢磨しながら目標に向かうことで、同市が掲げる「一人たりとも置き去りにしない教育」理念の表れとなっている。

各校は、「おおだて型授業」で示さ

れた授業構成を踏まえつつ、それぞれの課題や目標に応じて重点テーマを定めて、授業づくりを進めている。

例えば、同市立花岡小学校では、「『習う』から『学ぶ』への転換」をテーマに掲げている。算数や理科などの単元授業計画において、1単位時間の授業の形態を、基礎・基本の理解と習熟を図る「ベーシック授業」と、徹底した子ども主体の学び合いによって進める「チャレンジ授業」とに明確に分けて実施。その結果、1

コラム 1

「おおだて型授業」 の実践事例

大館市立第一中学校

リフレクションで学習内容と自分との関係に気付かせ、学ぶ意欲をかきたてる

◎生徒の疑問から本時の課題を設定し、主体的な学びを導く

大館市立第一中学校では、「探究型学習＝『教わる』からの卒業」を研究テーマに掲げ、基礎的・汎用的能力の育成に取り組んでいる。授業づくりで重視するのは、生徒の興味・関心を引く学習課題を設定し、その興味・関心を保ったまま効果的な「リフレクション」につなげることだ。小林一彦校長は次のように語る。

『活動あって学びなし』とよく言われますが、次につながる学びがなければ、それは意味のない学習活動になってしまいます。そうならないよう、授業の最後には、学習内容のまとめとは別に、必ずリフレクションを行っています」

リフレクションでは、教員が「生活とのつながり」「将来とのつながり」「自己の変容」「新たな学習や生活への意欲」に結びつけることを意識した発問をし、生徒の考えや発想、興味・関心を広げていく。

例えば、2年生理科の単元「化学変化と熱」の授業では、まず既習事項を思い出させる発問をし、生徒自身の疑問から「化学変化の前後で、温度はどのように変化するか」という学習課題を設定（写真）。グループごとに予想を立てて実験を行い、化学変化の前後で温度が上がるもの（発熱反応）と下がるもの（吸熱反応）があることを突き止めた。リフレクションでは、教員が「こうした反応は、生活のどういう場面で活用されている？」と尋ねると、生徒はしばらく考えてから「使い捨てカイロ」「冷却剤」などと答え、日常生活でも化学反応が活用されていることに気付いていった。冷却シートも挙がったが、教員がそれは吸熱反応ではないことを具体的に説明し、化学反応への理解と関心をさらに深めさせた。

探究型学習では、生徒が自分の考えを安心して出し合える、共感的な雰囲気醸成することも重視する。

「例えば、教員の質問に即座に挙手をした生徒をすぐ指名



写真 2年生理科の授業の冒頭では生徒を黒板の前に集め、既習内容について質問をしたり、簡単な実験を再現したりしながら、生徒たちから疑問を導き出して、学習課題を設定した。

して答えさせると、まだ考えている生徒は置いていかれた気持ちになります。そこで、しばらく考える時間を取るといった配慮をし、全員が参加できる学びをつくり上げています」（小林校長）

取材した授業でも、答えに詰まった生徒には、ほかの生徒が自然に「ドンマイ」と声をかけていた。

また、生徒が授業中に壁にぶつかった時、それを乗り越える力は、「大館ふるさとキャリア教育」でも培われていることを実感していると、小林校長は語る。

「生徒たちは、就学前から一貫して地域の中に入り、課題の解決に向けて真剣に考え、仲間と協働し、皆の前で発表する活動を続けています。そうした中で、課題に対応する能力が徐々に育っていることを、授業中の様子から感じています」



校長

小林一彦 こばやし・かずひこ

教職歴 34年。同校に赴任して2年目。

大館市立第一中学校プロフィール

生徒数 453人

学級数 18学級（うち特別支援学級2）

電話 0186-42-4177

URL <http://www.odate1.sakura.ne.jp/>

単位時間の授業のねらいがシンプルになり、子どもの集中力も学習効果も高まった。同時に、「チャレンジ授業」は、同校の目指す「課題対応能力の育成」というキャリア能力を培う実践の場にもなっている。

また、同市立城西小学校では、学び合いの時間を「本気ZZタイム」と名づけた。一人ひとりが課題に取り組んだ後に設定している学び合いの

時間で、子どもに「共感(相手のよさに気づくこと、認めること)」と「協働(1つの目標に向かい、よりよいものに高めること)」の2つを意識させる。ポイントは、魅力ある課題を設定できるかどうかで、それにより学び合いの質が高まっていく。

学び合いでは、「SL(学習リーダー)」が進行役となり、教員はコーディネーターと支援役に徹する。高学

年になると、SLが何か言いたそうな表情をしている友だちを見取って指名したり、メンバー同士の発言をうまくつないだりするようになる。そのため、教員は理解が遅れている子どもへの個別指導をしやすくなると、同校の三浦栄一校長は語る。

「SLは輪番制とし、すべての子どもに担当させています。普段の授業から自分たちで学習を進めているからでしょう。担任が出張で不在だった際にも、子どもたちだけで学びを進める姿が見られ、驚きました。まさに、主体的な学びが定着しつづえると実感しました」

▶▶▶実践事例 コラム1 参照

地域と連携した「百花繚乱作戦」

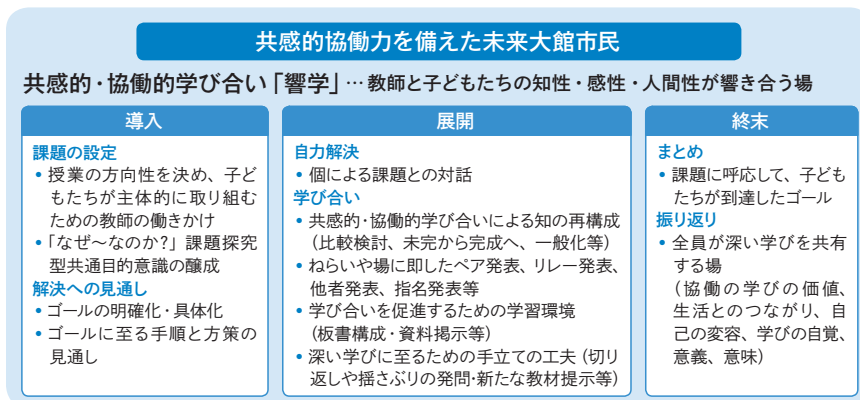
学校経営の柱となる
地域に根差したテーマを設定

「おおだて型学力」を育むもう1つの柱が、「大館ふるさとキャリア教育」だ。ふるさとに生きる基盤を培うふるさと教育と、自らの人生の指針を描くキャリア教育を融合させたもので、主に2つの施策がある。

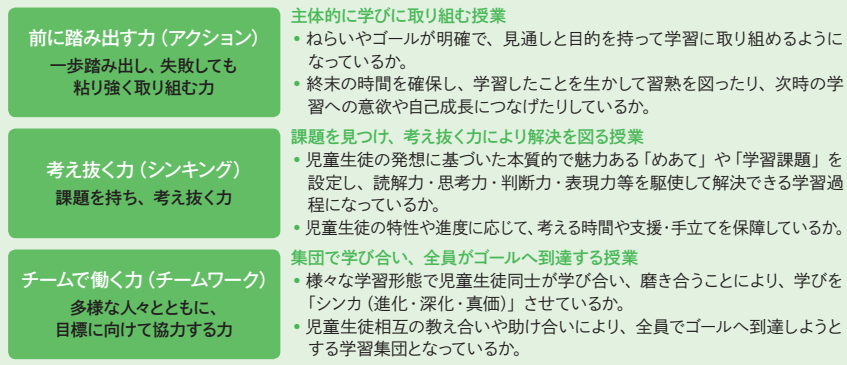
1つめは、各校が地域や学校の特色・課題を踏まえて1つのテーマを設定し、子どもが地域と協働しながら体験学習を行う「百花繚乱作戦」だ。2010年に同市立釈迦内小学校が始めた「元気いっぱいひまわり油プロジェクト」(図4)をモデルとして、2011年度から全市立小・中学校で展開している。

「釈迦内小学校の活動を見ると、友だちや地域の人と一緒にひまわりを栽培したり、商品を販売したりする中で、子どもは学校生活と別質の生き生きとした表情をしていました。また、地域の人々が学校と連携した活動にやりがいを感じ、活力を得ている姿も印象的でした。これは子どもと地域の双方に喜びや希望が生まれ

図3 「おおだて型授業」の基本構成と授業の視点



「おおだて型学力」を鍛える授業の視点



*大館市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

図4 大館市立釈迦内小学校「元気いっぱいひまわり油プロジェクト」

大館市立釈迦内小学校では、地域の休耕田を借りて、子どもがひまわりを栽培する。地元住民の協力を得て、収穫した種から搾油したひまわり油を製品化し、市内のイベントなどで販売。収益金を修学旅行の費用に充てるサイクルを確立した。この活動は、校区の幼稚園や中学校、高校にも拡大し、地域一体で進める活動に発展。2014年の文部科学大臣奨励賞を始め、様々な賞を受賞した。現在は、「新ひまわりプロジェクトSKIP」として、収益は全学年の活動に還元している。詳しくは下記ウェブサイト参照。

<https://shakanaisp.com/about>



製品は年々進化。現在ではドレッシングも販売。

る活動だと確信し、同様の取り組みを市内全校で実施しようと決めました」(高橋教育長)

活動を進める際に最も重要となるのは、各校でのテーマ設定だ。子どもや地域の人の本気で取り組めるテーマでなければ、主体的な活動とはならない。また、活動を通して子どもに育成したい資質・能力を十分に検討した上でテーマを設定しなければ、楽しいだけで終わってしまう。

「単に行事やイベントを企画するの

ではなく、地域にしっかり目を向けて、学校経営の柱として取り組めるテーマを設定してほしいと説明しました。すると、校長や教頭が地域を訪れて議論を重ねたり、子どもと教員が話し合ったりして、テーマを模索する姿が見られました。学校の特色を全国トップレベルにまで磨き上げられるような活動になることを期待しています」(高橋教育長)

▶▶実践事例 **コラム2** 参照

職場体験「子どもハローワーク」

登録数は約240か所、多様な体験で地域の魅力を発見!

「大館ふるさとキャリア教育」の2つめの施策は、2012年から大館市教育委員会(以下、市教委)が運営する「子どもハローワーク」だ。これは、市内の小学1年生～中学3年生を対象に、企業や公共機関、各種施設での職場見学・体験を提供する教育課程外活動で、毎年延べ2,000

コラム2

「百花繚乱作戦」 の実践事例

大館市立城西小学校

400年以上前から伝わる例祭の存続をかけたプロジェクトを始動

◎地域の伝統行事に深くかかわる活動で地域への思いを育む

大館市立城西小学校の校区には、農村部と商業地域が混在し、地域が1つにまとまりづらいという課題があった。そこで、学校と地域が1つとなって取り組めるテーマを三浦栄一校長を中心に検討し、2019年度、学区内の大館神明社の例祭を盛り上げる「弥栄プロジェクト」を始動させた。

「地域の状況を調べていく中で、大館神明社の例祭が400年以上前から伝わる伝統行事であり、地域の五穀豊穡を祈る重要な祭りであるにもかかわらず、ここ数年、山車やお囃子、踊りなどの担い手が減少し、存続が危ぶまれていることを知りました。地域の伝統行事を支える活動を通して、地域に息づく豊かな歴史や文化を子どもが理解するとともに、大きなやりがいを感じるだろうと考えました」(三浦校長)

大館神明社を知らない子どももいたが、例祭の保存会を学校に招き、お囃子を披露してもらおうと、子どもたちから大きな歓声が上がリ、普段の授業とは異なるエネルギーが生まれた。三浦校長は、伝統文化には子どもをも引きつける力があり、プロジェクトも成功すると確信したという。

プロジェクトの内容は、1～3年生は大館神明社とその周辺を探検して地域理解を深め(写真)、4年生は例祭を紹介するポスターやビデオを作成する。5年生は地域の人からお囃子や踊りの指導を受けて地域のイベントで発表し、6年生は商工会へのインタビューなどを通して例祭に関する課題とその解決策を検討し、市長などに提言するという活動を予定している。

地域の伝統文化にかかわる活動を通して、自分が生まれ育った場所に素晴らしい伝統文化があり、それに多くの人がかかわっていることに気づいていく。そして、地域のよさを地域内外の人たちに発信し、自分たちの力で地域をどう変えていきたいかを考え、行動するようになる。そうした活動を



写真 2019年の春に3年生が行った大館神明社見学の様子。同校は、県内初のコミュニティ・スクールであり、教員にとっても地域との交流を深める貴重な機会となっている。

6年間積み上げていくことで、思考力や対話力など、様々な資質・能力を育成していく考えだ。

「子どもにとって、地域の中で活動し、地域に貢献する経験はとても重要です。そうした経験を積み重ねて、地域には自分たちにできることが数多くあるという感覚を育みたいと考えています。そうすれば、例えば将来、『地域に就きたい仕事がなければ、自分でつくろう』といった発想にもつながるのではないかと期待しています」(三浦校長)

今後は、教科学習においても地域素材の活用を進めていく。

「神社の歴史を社会科の教材とするなど、工夫次第で子どもの興味・関心をより引きつける学習テーマを設定することができます。地域の人たちと連携しながら、社会に開かれた教育課程の実現を目指していきます」(三浦校長)



校長

三浦栄一 みうら・えいいち

教職歴 38年。同校に赴任して2年目。

大館市立城西小学校プロフィール

児童数 298人

学級数 16学級(うち特別支援学級4)

電話 0186-42-3238

URL <http://www.jousei.sakura.ne.jp/>

人以上が週末や長期休業を利用して参加している。水力発電所の見学、農業体験、伝統工芸品の製作、地域行事のスタッフなど、見学・体験先は多種多彩で、子どもは自分がやりたいことを選び、何度でも参加できる。

「子どもたちは、職場体験を通して、働くことへのイメージを膨らませるとともに、地域の中に責任感や誇りを持って仕事に取り組む大人が大勢いることを実感します。地元の伝統工芸品である曲げわっぱの製作を体験したことがきっかけで、卒業後にその道に入ったり、葬儀社での体験学習で納棺師の仕事に感動し、その企業に就職したりといったケースもあります」(高橋教育長)

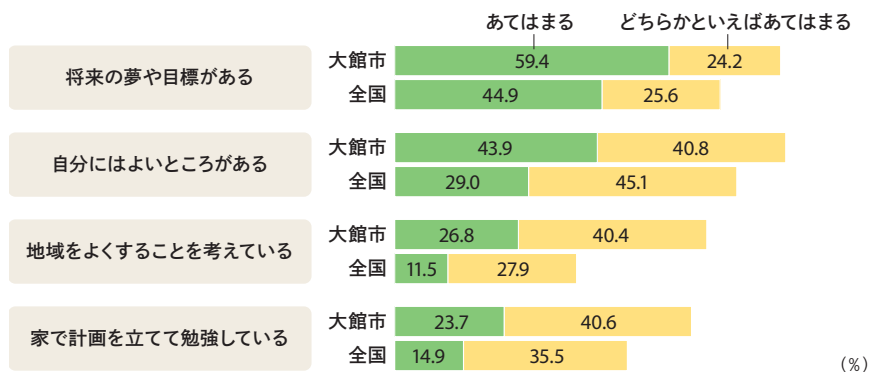
連携先の事業所は年々増えている。当初は、市教委の担当者が市内各所を回って協力を依頼していたが、今では企業からの受け入れ希望が多く、現在約240か所の登録がある。

「職場体験は、受け入れ側にとって、自分たちの仕事を子どもに知ってもらうことができ、仕事の意義や地域貢献を捉え直すきっかけになります。そうしたよさを理解していただいているようです」(高橋教育長)

「子どもハローワーク」に関する業務は、すべて市教委が担当する。職場見学・体験は、キャリア教育において重要な取り組みだが、受け入れ先との業務連絡や事前・事後指導などの負担が大きいため、学校がすべきことの優先順位を踏まえた判断だ。

「大館ふるさとキャリア教育」の成果は、子どもたちの姿に表れている。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果から、子どもたちの自己肯定感や自己有用感が高いことが分かった(図5)。市教委は、この要因として、地域の人たちと触れ合う中で、「よく頑張ったね」「大人になったらうちに就職してね」など、前向きな言葉をかけられることで、自信を深めたり、

図5 大館市の子どもの自己肯定感・自己有用感等(中学3年生)



文部科学省「全国学力・学習状況調査」(2019年度)の結果から。小学6年生の結果も同様の傾向が見られた。
*大館市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

自分の新たな一面を発見できたりすることを挙げる。

同市は当初、「おおだて型学力」の育成を目指す際に、授業改善と「大館ふるさとキャリア教育」は別個のものとして捉えていた。ところが、実践が進むにつれ、両者は不可分な施策であることに気づいていった。各校が主体的に試行錯誤した結果、現在の体制になったという。

「地域や学校の課題を自分と結びつけて取り組んだり、自分の関心に応じた仕事を体験したりする中で、自ずと主体性が高まるのでしょうか。そうした経験と、学校での共感的・協働的な学びとがつながり、子どもなりに『何のために学ぶのか』『どうして授業を受けるのか』といった学びの本質が見えてきて、日々の学習に主体的に取り組む姿勢や、学習集団内のよい雰囲気の醸成につながっているのだと感じます」(高橋教育長)

2018年11月には、同市の実践を発表する「秋田県学力向上フォーラムin大館」を開催した。県内外から約1,500人の参加があり、熱い思いを持って教育に取り組む全国の教員の存在を実感する場となった。

「ペーパーテストで測れる学力は、子どもに育てたい資質・能力のほんの一部に過ぎません。これからも常に新たな取り組みに挑戦し、その実

践と成果を県内外に広く発信していきたいと考えています」(高橋教育長)

教育委員会の役割

好事例を市教委が整理 全市で共有し、改善に生かす

市教委では、各校の実践内容を把握し、好事例を市内全校で共有している。校長会や学校訪問時に情報提供をするほか、優れた授業実践を行う教員は「授業マイスター」として表彰し、そうした教員が行う研究授業への参加を推奨している。また、教育研究所が主管する「おおだて型学力推進委員会」で、各校の取り組みを紹介する資料を作成・配布したりしている。

その際、「おおだて型授業」「大館ふるさとキャリア教育」とともに、市としての目標や基本的な考え方は示すが、目標に到達する方法は各校に任せている。そうすることで、教員の主体性が高まり、より特色のある取り組みとなっていくからだ。

教育長自ら学校に出向き、授業改善の必要性を伝えている点も大きい。

「成功した教師主導の授業より、失敗した学び合いの方が価値が高いと、先生方に常に訴えています」(高橋教育長)

今後は、同市における「深い学び」を、さらに追究していく考えだ。